TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

2021/07/07

山城知佳子　リフレーミング

YAMASHIRO CHIKAKO: Reframing the land/mind/body-scape

2021 年 8 月 17 日(火)－10 月 10 日(日)

《リフレーミング》2021 年（新作）
© Chikako Yamashiro
Courtesy of Yumiko Chiba Associates

映像・写真を主たるメディアとして、2000 年代から精力的に作家活動を進めてきた山城知佳子(1976 年沖縄県那覇市生まれ／在住)は、生まれ育った沖縄の歴史や地政学的状況と自身との関係に向き合うことを通じて、見過ごされ聞き過ごされてきた声や肉体、魂を伝える作品を手掛け、国内外で高く評価されてきました。

山城が生み出す映像は、見る者の身体感覚に訴えかけるイメージの豊饒さと詩性、そして同時代を見つめる批評的な視点を絶妙なバランスであわせ持つがゆえに、沖縄という特定の地域の問題に留まらず、より広い文脈での読み込みや解釈に開かれています。

公立美術館初個展となる本展では、初公開となる山城の最新作を、収蔵作品を中心とした過去の代表作品と組み合わせて紹介します。単に時系列に沿って作品の変遷をたどるのではなく、新旧の作品を有機的に配置することで、相互に共鳴する主題やモチーフの連なりを、展示室内を回遊しながら巡る構成とします。

最新作のタイトルでもある「リフレーミング」とは、ものごとを見ている枠組みを変え、別の枠組みで見直すことを指しており、写真・映像によって故郷沖縄の風景を新たな視点でとらえなおし見つめていくという、山城作品に通底する姿勢を象徴します。本展は、国際的にもさらなる飛躍が期待される映像アーティスト・山城知佳子のミッドキャリア個展として、その作品世界を総覧するはじめての本格的な機会となります。

本展は、オリンピック・パラリンピックの開催都市東京が展開する文化の祭典「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の１つとして実施するものです。

THE FUTURE IS ART
文化でつながる、次へとつながる。
Tokyo Tokyo FESTIVAL

作家プロフィール

写真：鷹野 隆大

山城 知佳子｜Yamashiro Chikako

映像作家、美術家。1976 年沖縄県那覇市生まれ、在住。1999 年沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科絵画専攻(油画)卒業。2002 年沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科環境造形専攻修了。2019 年より東京芸術大学美術学部先端芸術表現科准教授。

近年の主な展覧会に「話しているのは誰？現代美術に潜む文学」(2019 年／国立新美術館)、「済州 4・3 事件 70 周年祈念　ポストトラウマ」(2018 年／済州道立美術館、韓国)、「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017」(2017 年／堀川御池ギャラリー、京都)、「あいちトリエンナーレ 2016：虹のキャラバンサライー創造する人間の旅」(2016 年／旧明治屋栄ビル、愛知)、「第 8 回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(2015 年／クイーンズランド州立美術館、オーストラリア)などがある。

「第 31 回(2020 年度)タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞」(2021 年)、「Tokyo Contemporary Art Award(TCAA)2020-2022」(2020 年)、「Asia Pacific Breweries Foundation Signature Art Prize 2018」大賞ノミネート(シンガポール美術館)(2018 年)、「第 64 回オーバーハウゼン国際短編映画祭ゾンタ賞」(2018 年) 、「Asian Art Award 2017 supported by Warehouse TERRADA」大賞(2017 年)などを受賞。

主な書籍に『循環する世界　山城知佳子の芸術』(2016 年)、『Chikako Yamashiro』(2012 年、ともにユミコチバアソシエイツ刊) がある。

開催概要

展覧会名[和]　山城知佳子 リフレーミング

展覧会名[英]　YAMASHIRO CHIKAKO: Reframing the land/mind/body-scape

主　催　東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、日本経済新聞社

会　期　2021 年 8 月 17 日(火)－10 月 10 日(日)

会　場　東京都写真美術館 地下 1 階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電　話　03-3280-0099　www.topmuseum.jp

開館時間　10:00-18:00(入館は閉館 30 分前まで)

休館日　毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館し、翌平日休館)

観覧料　一般 700 円／大学・専門学校生 560 円／中高生・65 歳以上 350 円

※小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2 名まで)は無料。

※本展はオンラインによる事前予約を推奨します。詳細はホームページをご参照ください。

本展のみどころ

山城知佳子の公立美術館初となる大規模個展

本展は、山城知佳子にとって初めてとなる公立美術館での個展です。初期作品《BORDER》(2002 年)から、最新作《リフレーミング》(2021 年)までの主要な作品を、あたかも総合的な一つの作品であるかのように配置することで、個々の作品が相互に連環しあう山城作品の全体像を体感いただける展示となります。令和 2 年度に新規収蔵した代表作《土の人》(オリジナル 3 面バージョン)、写真作品《黙認のからだ》シリーズ全点などをまとめてご紹介します。

最新作《リフレーミング》を初公開

本展のハイライトは、山城知佳子の最新作となる《リフレーミング》です。《土の人》が、長年取り組んできた「記憶／声の継承」というテーマの集大成だとするなら、《リフレーミング》は、山城が沖縄の風景と現実に新たな視点で向き合い、取り組んできた近年のリサーチの最新成果です。史実を踏まえながら、沖縄北部の風景・地形を題材に映画的なナラティブや会話劇を取り入れ、おとぎ話のような物語を描き出します。

多彩・多才な出演陣

《リフレーミング》には、《創造の発端》(2015 年)にも出演した川口隆夫、振付家・ダンサーであり、アートと社会を繋ぐ活動を展開している砂連尾理、沖縄出身でモデル・映画俳優として活躍する尚玄ら多彩・多才な出演者が集い、作中で見せる彼らの身体表現／ダンスが、物語の核の一つになっています。あわせて沖縄芝居の役者たちも登場します。

新進から中堅、更なる活躍へ飛躍

東京都写真美術館では、「第 2 回恵比寿映像祭　歌をさがして」、「ニュースナップショット　日本の新進作家展 vol.9 [かがやきの瞬間]」(ともに 2010 年)で、いち早く山城知佳子を取り上げ、沖縄という文脈のみにとどまらない同時代のアーティストとして、また写真・映像作家として評価してきました。今回の個展では、その後の目覚ましい活躍を経て、中堅作家として凱旋します。ダンディー・コンテンポラリー・アーツ(イギリス)での個展、第 11 回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ(韓国)への参加ほか、海外での発表を複数控え、更なる飛躍が期待されるアーティストの現在地点にぜひご注目ください。

出品点数（予定）

計 29 点(映像 8 作品、写真 21 作品)

展覧会の構成

起点ーそこにある風景

沖縄の海や山、そこに営まれる生活、死者と生者が交感する場の象徴としての墓庭、そして眼前に連なるフェンス。《BORDER》は、故郷である土地の歴史と現実を、そこにある風景として見つめた山城の原点ともいえる短編映像作品です。過去と繋がる回路をも断ち切って引かれたボーダー線の抗いがたい力と、そこにある現実を見据える山城の決意とがストレートに提示されています。

■出品作品

《BORDER》2002 年 シングルチャンネル・ヴィデオ　東京都写真美術館蔵

私というメディア

山城知佳子の初期作品には、作家自身の姿がたびたび現れます。ヴィデオや写真は、作家が自らの身体をもって主題を受け止め、理解し、そして見る者へと投げかけるパフォーマンスの舞台となりました。同時に、山城の行為を介して、その背景にある場所自体の存在が強調され、見る者に語りかけ始めます。

2007 年以降、「戦争体験」の継承をテーマに取り組んだ山城は、「声」や「語り」を通した継承のありかたについて、さまざまに考察を重ねました。《あなたの声は私の喉を通った》では、絞り出すように自身の痛切な戦争体験を伝える他者の語りを、繰り返し自らの声でなぞることを通じて、いかに他者の経験を理解し体感することが可能か、あるいはそれがいかに困難か、を顕わにしました。

■出品作品

《オキナワ TOURIST I like Okinawa Sweet》2004 年 シングルチャンネル・ヴィデオ　作家蔵（1）

《OKINAWA 墓庭クラブ》2004 年 シングルチャンネル・ヴィデオ　東京都写真美術館蔵（2）

(1)

(2)

画像はすべて© Chikako Yamashiro　Courtesy of Yumiko Chiba Associates

《あなたの声は私の喉を通った》2009 年 シングルチャンネル・ヴィデオ 東京都写真美術館蔵

擬人化された風景

山城の描き出すイメージは、風景を擬人化することで、しばしば寓話的な趣をとります。山城の空想が生み出した架空の存在をモチーフとした《アーサ女》では、波間に浮かぶ海藻のように浮き沈みしながら漂うカメラから海岸線をとらえることによって、人でないものが、分断に揺れる岸辺を見つめているという構図が生み出されています。
2010 年に東京都写真美術館の新進作家展で発表した写真シリーズ《コロスの唄》には、世代の異なる人々の姿が、コントラストの強い木漏れ日のもとで輪郭を失い風景とひとつに溶け合うさまが映し出されています。山城は、地面に堆積した声なき者の思いや記憶と、不可能を前提にそれを継承しようと試みる生者の想いの響きあいを、「唄」になぞらえ視覚化することを試みました。
13 点から成る写真シリーズ〈黙認のからだ〉では、洞窟の奥底で長い時を経てかたちづくられた鍾乳石のイメージが、被写体の動きにより輪郭がぶれてぼやけた人体像と並置されることで、あたかも人体(あるいは異形の生きもの)の部位であるかのように提示されています。

地の底から「プシュプシューッ」と吹き出る彼らの呼吸音を探していた。
海底から地底までの上昇中、声が小さな無数の気泡となって、
ようやく地面に辿り着き、弾けた。無数の穴から吹き出している。
あちこちに潜んでいる者たちに輪郭が届けられる。彼らはまだ森の中に、
漂いの中に生きている。彼らの声を聴く。
他者の記憶が生暖かい息を残し語り続けている
地響きのような残響を、唄を、聴こえてくる声を聴く。
(山城知佳子「コロスの唄」より抜粋)

■出品作品
《アーサ女》2008 年 シングルチャンネル・ヴィデオ 作家蔵 (3)
《コロスの唄》2010 年 発色現像方式印画 東京都写真美術館蔵 (4)

(3)

(4)

画像はすべて© Chikako Yamashiro　Courtesy of Yumiko Chiba Associates

《黙認のからだ No.1》-《黙認のからだ No.13》2012 年 発色現像方式印画　東京都写真美術館蔵

左から
《黙認のからだ No.1》
《黙認のからだ No.2》
＊2 点セットでの掲載のみ可

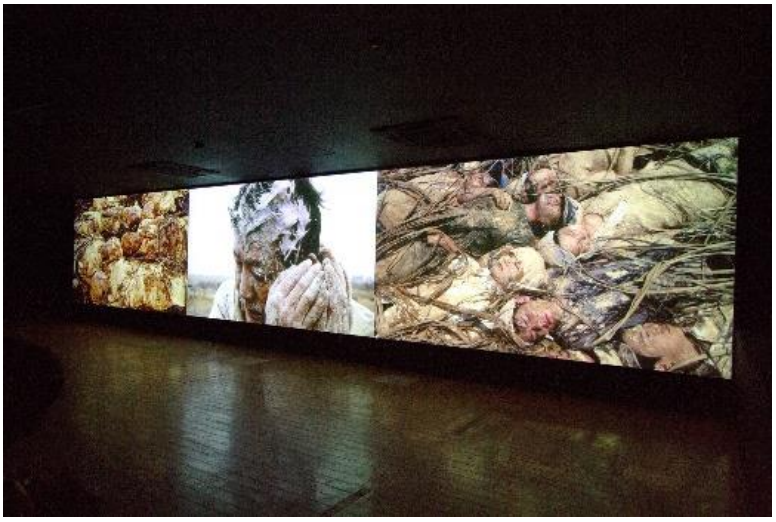
土の連なり：穴という回路

《創造の発端―アブダクション／子供―　‘A Piece of Cave 1-16’》は、2015 年制作の短編映像作品から派生して作られ 2016 年に発表されたインスタレーション作品です。ダンサーの川口隆夫が、泥と一体化しながら洞窟の闇の中を滑るように舞い踊るシークエンスを 16 台のモニターで構成。地底に張り巡らされた洞窟を縦横に巡るその姿は、大地に沈殿した記憶や痛みの回路を繋ぐ、地底の精霊のようです。
沖縄だけでなく、韓国の済州島でも撮影した《土の人》は、山城が沖縄という土地と向かい合うことで見出し、長年にわたり格闘してきた「記憶／声の継承」という主題について、さらに普遍的なものへと見事に昇華させた集大成ともいえる作品です。現地を取材し、それぞれの土地に固有の複雑な歴史を背景としてふまえつつ、全体を「土」というモチーフによる寓話として紡ぐことで、文字通り地続きのものとしています。

■出品作品

《創造の発端―アブダクション／子供― ‘A Piece of Cave 1-16’》2015 年 ヴィデオ・インスタレーション
東京都写真美術館蔵

《土の人》2016 年　3 チャンネル・ヴィデオ・インスタレーション 作家蔵



画像はすべて© Chikako Yamashiro
Courtesy of Yumiko Chiba Associates

最新作《リフレーミング》

《土の人》で、「記憶／声の継承」という主題に一区切りをつけた山城は、より俯瞰的な視点で沖縄の風景を見つめるとともに、沖縄の近現代史のなかで見過ごされてきた事象のなかにフィクションの可能性を見出し、新たなリサーチに取り組んできました。最新作《リフレーミング》では、カルスト地形で知られる名護市安和を舞台に、沖縄の海と山とをつなぐ寓話を創作。過去と現在、地上と地下、山と海、人と人でないものとを切り結び、現代の風景に重ね合わせる物語を紡ぎだします。

■出品作品

《リフレーミング》2021 年（新作）

私は海のなかにいた。私のなかで抱かれる魚たちが、カチカチカチと話している。
カメが空を飛ぶようにちかづいて、かたわらに寄り添っている。私たちはやわらかく、波間にそよぐ私のからだは全体で、そして大きな丘だった。私は私のたくさんの、たくさんの私たちが笑っていた。

あるとき私は時間をかけて移動していた。そうしたかった。胸の中が熱くなって、私は私をかき集めた。そうして海から顔を出した。とけてうねってからだじゅうを鳴らして、大きく大きく顔を出した、ドドドドド。かたわらに月がいるようになった。カメとは会えずにいたけれどさびしくない。私は大きな山になった。

カチンカランコロコロキン。私を追いかけてサンゴが浜に転がる。折れたサンゴはさまよった。サンゴは山になった私を追いかけてきた。
カランカランゴロゴロドン。山はうるさくなった。私のまわりには折れたサンゴが集まってきていた。忘れている。私があなただったことあなたが私だったこと。私とあなたはまた海に戻りたい。

（山城知佳子《リフレーミング》制作ノートより）

画像はすべて© Chikako Yamashiro　Courtesy of Yumiko Chiba Associates

□《リフレーミング》おもな出演者

川口 隆夫(かわぐち たかお)

1996 年よりパフォーマンスグループ「ダムタイプ」に参加。 2000 年よりソロ活動を開始する。2013 年に初演した『大野一雄について』は世界各地で高い評価を受け、ベッシー賞ファイナリストにもノミネートされた。東京国際レズビアン＆ゲイ映画祭のディレクター(1996～99)、イギリス実験映画監督デレク・ジャーマンの著書『クロマ』の翻訳(2003)、短編映画『KINGYO』(エドモンド楊監督、2009 ヴェネチア映画祭正式招待作品)への出演等、その活動は多岐に渡る。

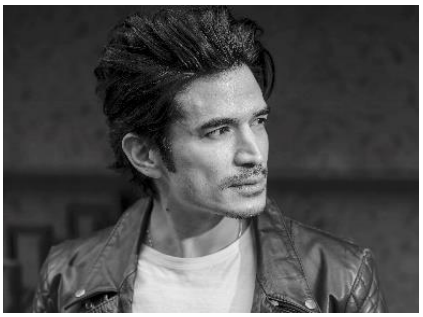
パフォーマンス／インスタレーション作品《A perfect life vol.6 沖縄から東京へ》を第 5 回恵比寿映像祭(2013 年、東京都写真美術館)で発表している。

写真：三浦博之

砂連尾 理(じゃれお おさむ)

振付家・ダンサー。1991 年寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を中心に、障がい者や高齢者、避難所生活者などとのプロジェクトも手がけ、アートと社会を繋ぐ活動を展開している。2002 年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」(グランプリ)、「オーディエンス賞」を W 受賞。2008 年度文化庁・在外研修員として、ドイツ・ベルリンに 1 年滞在。著書に『老人ホームで生まれた＜とつとつダンス＞―ダンスのような、介護のようなー』(2016 年／晶文社)。立教大学映像身体学科特任教授。

HP: https://www.jareo-osamu.com/



尚玄(しょうげん)

大学卒業後、バックパックで世界中を旅しながらヨーロッパでモデルとして活動。2004 年帰国、俳優としての活動を始める。2005 年戦後の沖縄を描いた映画『ハブと拳骨』でデビュー。三線弾きの主役を演じ、第 20 回東京国際映画祭コンペティション部門にノミネートされる。その後 2008 年に NY で出逢ったリアリズム演劇に感銘を受け、本格的に芝居を学ぶことを決意し、その年の末に渡米。現在は日本をベースに邦画だけでなく海外作品にも多数出演している。近年の主な出演作には『セクシャルドライブ』(吉田浩太監督、2021 年)、『Come and Go』(リム・カーワイ監督、2020 年)など。主演作『Gensan Punch 義足のボクサー』(ブリランテ・メンドーサ監督)も公開を控えている。

関連事業

1 階ホールでの上映や、作家および出演者が登壇する対談などの関連プログラムを開催予定です。
決定次第、当館ホームページに掲載いたします。

展覧会図録

「山城知佳子 リフレーミング」水声社発行
日英バイリンガル／B5 版／128 頁／価格未定
山城知佳子(出品作家)によるテキスト／岡村恵子(本展企画者・東京都現代美術館学芸員)による論考
本展出品作品および関連作品図版、関連マップ、年譜、文献表、出品リスト等を収録予定

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。
＊図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
＊図版の無断掲載はご遠慮ください。著作権者の許可なくトリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 /www.topmuseum.jp
展覧会企画　岡村 恵子(東京都現代美術館)
展覧会担当　藤村 里美 / 多田 かおり
広報担当　池田 良子 / 平澤 綾乃 / 鈴木 彩子 press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更することがあります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。